

指導者 西尾 美帆 (T1)
田中 智典 (T2)
土井 款 (T3)

1 単元名 「隼すいすいランドで遊ぼう！」(水遊び)

2 授業づくりの構想

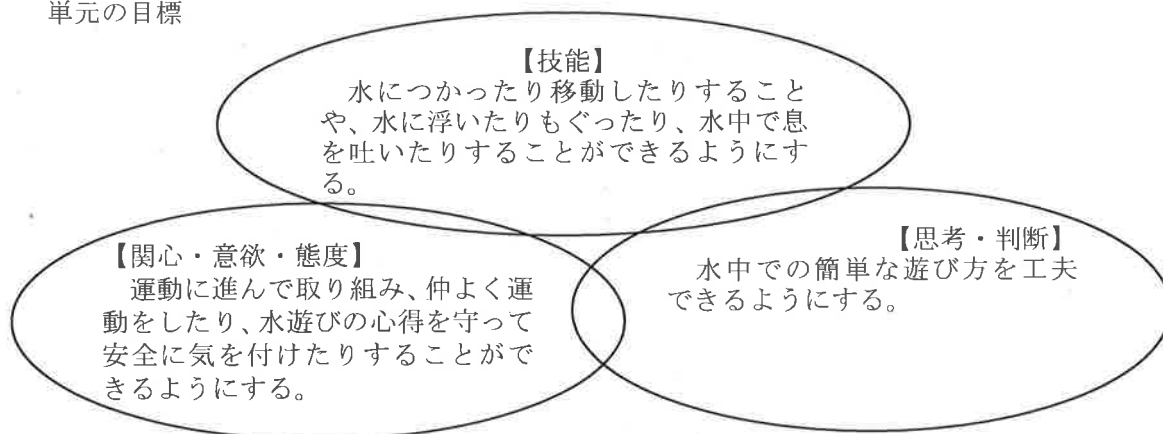
(1) 運動の持つ特性

- 低学年の「水遊び」は、中学年での「浮く・泳ぐ」運動、高学年での「水泳」と続いている。水泳は、水に体を浮かばせた状態で、腕を動かして水をかいたり、足を使って水をけったりすることによって泳ぐことができる。正しい泳ぎ方を身につけたり、効率よく泳いだりするためには、姿勢よく水に浮くことが大切であるが、水に浮かぶ感覚は日常生活で経験することがあまりないため、学校体育や家庭での水遊び等を通して身につけなければならない。しかし、水中では陸上で感じることもない水圧・浮力・抵抗を感じると同時に、目を開けても視界が不明瞭だったり、音が伝わりにくかったりするため、慣れるまでは水に入ったり、もぐったりすることに大きな不安が伴う。
- 水遊びは、それぞれの児童の能力に適した動きに取り組む活動を通して、水の特性について体験的に知ることができる運動である。水に慣れる遊びや浮く・もぐる遊びを通して、課題を達成する喜びを味わうこともできる。しかし、一度嫌な思いや怖い思いを経験してしまうと、苦手意識が強に残ってしまうことがある。
- 水遊びでは、水に慣れ親しむことや浮いたりもぐったりすることを楽しく行う中で、水につかって息を吸ったり吐いたりすること、水の抵抗や浮力に負けないように走ったり方向をかえたりすること、何かにつかまって水に浮くこと、水にもぐって目を開けることとともに、息のとめ方やはき方、体の力の入れ方や抜き方なども身につけることができる。
- 一人一人の児童が自己の能力に応じたためあてをもち、練習を工夫し、互いに協力して学習を進めることで、水遊びの楽しさや喜びを味わうことができる。

(2) 児童の実態

- 1・2年生(1年5名、2年5名)の児童は、男子7名、女子3名の合計10名で体育学習を行っている。昨年の保育所での水遊びや1年生の体育の学習では、入水に抵抗を示す児童もみられたが、水遊びの経験を積み重ねることで、徐々に水に慣れてきている。しかし、水中で目を開けることが苦手な児童もまだ見られる。また、水温が低いときの入水に抵抗感が強い児童がある。
- 事前の聞き取り調査(2年生)では、水遊びを楽しいとらえている児童が4名いた。それらの児童は、「水をかけられることが好き」「泳ぐのが好き」「もぐるのが好き」のように、水から受ける感覚や水に浮かぶ感覚を理由に挙げていた。また、「おにごっこが楽しかった」というように、友だちとなかよく遊ぶことを理由に挙げている児童もみられた。一方、苦手意識のある児童は1名おり、「目を開けられない。」「息つぎの時、鼻から水が入るのが嫌」「深いところがこわい。」という水に対する恐怖感や今までの嫌な思いをした経験を挙げていた。
- 児童は、いろいろな水遊びを楽しんできているが、速く移動したいのにどうしていいかわからない、浮きたいのに沈んでしまう、逆にもぐりたいのに浮いてしまうなど、水の中で自分の体をうまく動かせない経験をしてきている。

(3) 単元の目標



(4) 学びへの働きかけ（指導の意図）

《学習内容の明確化》	
○	単元全体の学習の流れを掲示し、学習内容を視覚化することにより、技能の系統性を意識させるとともに、経験した活動にシールを貼って達成感を共有させ、意欲的に取り組めるようにする。
○	活動②の時間に、動きのポイントを意識した発問を用意しておき、個人の気づきを全体で共有できるようにする。
○	学習カードに色シールを貼ることで、児童一人一人の達成度と満足感を把握し、学習で取り上げる運動の決定に役立てる。
○	学年に応じた一人一人の水泳のめあてを学習の最終的な姿としてイメージさせ、それに向かうための練習方法や楽しむ場を選択できるようにする。
《単元構成の工夫》	
○	活動①で友だちどうしが声をかけあいながら楽しく活動したり、活動②で児童の大好きなビート板を使ったばた足の動きを取り入れたりして、浮く・泳ぐ運動につながる感覚を身につけさせる。
○	単元後半ほど活動②の時間を増やしていき、身につけた動きを活用する場面を増やす。
○	学習に楽しく取り組んだり、明るく挑戦したりする雰囲気づくりをするため、水にもぐる前の声かけと、がんばった友だちや友だちのよい動きに対する賞賛を大切にする。
《学び合いの充実》	
○	学習の中で見つけた友だちのよい動きを近くの友だちと教え合う場や時間をつくる。
○	いろいろな水遊びをしながら気づいた水の特性やおもしろい動きを書き留めて掲示しておき、随時ふり返ることで、よりよい動き方に結び付けて考えられるようにする。
○	「せんせいあのおね カード」には楽しかったことやできるようになったこと、自分が考えた遊びなどを絵や文で表現させ、児童の気持ちを視覚化してみんなで共有させる。

(5) 単元の流れ及び評価の計画

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能
一年	①水に慣れる遊びや浮く・もぐる遊びに進んで取り組もうとしている。 ②運動の順番を守り、友だちと仲よく運動しようとしている。	①水に慣れる遊びや浮く・もぐる遊びの行い方を知り、楽しく遊ぶことができる場や遊び方を選んでいく。 ②水につかったときの動き方や水に浮いたりもぐったりする動き方を知り、友だちの動きをまねしている。	①水につかって水をかけ合ったりまねっこをしたりして遊ぶことができる。 ②電車ごっこやリレー遊びなどをして遊んだりすることができる。
二年	③補助具の準備や片づけを友だちと一緒にしようとしている。 ④プールサイドは走らないなどの水遊びの心得を守ろうとしている。	①水に慣れる遊びや浮く・もぐる遊びの行い方を知り、楽しく遊ぶことができる場や遊び方を選んでいく。 ②水につかったときの動き方や水に浮いたりもぐったりする動き方を知り、友だちのよい動きを見付けていく。	③壁や補助具につかまって水に浮いて遊んだり、水にもぐっているいろいろな遊びをしたりすることができる。

	1	2～4	5～8	9～11	12～15(本時15)	16・17	
主なねらい	学習の進め方を理解する。	水につかって、友だちとなかよく遊び、水に慣れる。	いろいろな水遊びを取り上げ、もぐる遊びを楽しむ。	もぐる動きを習得し、浮く遊びを楽しむ。	水中でできる遊びを工夫する。泳ぎにつながる遊びを楽しむ。	一人一人の伸びをたしかめる。	
核となる学習内容	・学習のねらいと進め方 ・施設等の使い方 ・きまり、安全面	・まねっこ遊びや電車ごっこなどで、水につかったり移動したりを楽しく行う。	・水中じゃんけん、にらめっこなどで楽しく遊びながら、頭を水につける。	・水にもぐったり浮いたり、バブリングやボビングを楽しく行う。	・自分の力に合った遊び方を選ぶ ・友だちのよい動きを見付ける。	・できるようになった水遊びを友だちと見せ合う。	
学習活動	・学習のねらいと進め方を知る。 ・施設等の使い方について知る。 ・きまり・学習の場・安全面について知る。 ・「やってみよう」を行う。 ・ふりかえり	活動①「きまりをまもって水慣れ遊びやもぐりっこ遊び、うきっこ遊び」 ・水に慣れる水遊びをしよう。 「まねっこ遊び」…肩まで沈んだり、方向を変えたりしていろいろな歩き方をする。 「電車ごっこ」…友だちの肩をしっかりとつかんで、電車がきれいようにする。 「水中リレー」「おにごっこ」…底に足をつけて移動する。 ・もぐる遊びをしよう。 「水中じゃんけん」「にらめっこ」など…目をしっかりと開ける。 「宝さがし」など…底までもぐる。 「輪くぐり」…頭を入れてもぐる。 ・いろいろな浮く遊びを行う。 「ぶくぶくロケット」…息を吐きながら頭までもぐり、浮力を使ってジャンプする。 「けのび」「けのびばた足」…壁をけて、遠くまで進む。 「輪くぐり」…いろいろな深さにある輪の真ん中をけのびで進む。 「らっこの昼寝」…ビート板をおなかにつけて、力を抜いて浮く。 「ふわふわくらげ」「ぶかぶかだるま浮き」など…力を抜いて浮く。 「ぶかぶか競争」「すいすいリレー」…浮いて、前に進む。					
		活動②「もぐりっこ遊びやうきっこ遊びを工夫して楽しむ」 はやぶさ水遊び大会					
評価の計画	関	④	①	②	①	③	②
	思		①	①	①	①	②
	技		①	②	③	③	③

- 【成果】・単元を通して、お互いの動きを見あったり、感想を話し合ったりするなどの学び合う場面を設定したことで、子どもの中から技能面のポイントが出てきたり、主体的にアドバイスし合ったりする姿が見られるようになった。
- ・子どもたちが、進んだ距離や、くぐった本数など、めあてを持って活動できる教具を用いることが、子ども自身が学習効果を実感し、自信を持って運動に取り組む姿につながった。
- 【課題】・あいさつ→準備運動→水慣れの動きをルーティーン化することで、単元後半になる程運動時間は増えた。しかし、学び合いと運動時間のバランスについては、どの単元でもよく検討しておかねばならない。
- ・型にはまった学び合いから、自由に話し合いながら学び合う姿につなげていきたい。